
彼女の記憶

椎野柚香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼女の記憶

【Zコード】

N6325B

【作者名】

椎野柚香

【あらすじ】

再会を約束をし、彼女が一家で渡米してから五年。僕の知る限りずっと彼女からの連絡はなかつた。当然の如く、僕は彼女との再会をほほ諦めていた。しかし、彼女の十五回目の誕生日が近づくにつけ、僕は突然悪夢に魘されるようになる。そして、彼女の誕生日を一ヶ月前に控えた十一月の第二火曜日 その日もろくに睡眠をとれていなかつた、そんな僕にクラス一の情報通である谷口敬太は、思つてもみなかつた情報を持ちかけてきたのだつた。

プロローグ

よく見る夢がある。

見終わつたときには、必ず僕は麁されている。汗をびつしよりか
いて、シーツまでも濡れてぐしづくになつてゐる。絞つたら、
コップ一杯の汗が出るかもしね。

夢だ

そして、もう一つ決まつてこゐる。」

夢の中の僕は小学校低学年くらいの僕つてこと。どうして、小学校低学年くらいの自分だつて、わかるかつて。そりや、わかるさ。自分のことなんだから。背丈もそうだし、何より、僕は小学校四年生まで眼鏡をかけていたから。黒くて細いフレームで縁取られた、四角いレンズの眼鏡。幼い顔には、その眼鏡は不釣合いで、印象が大きすぎた。結果、その頃の僕のあだ名は、めがね君だつた。

僕は、もう動き出してもいい頃かな、と思い、これが合図だとでもいうように、ずれてきた眼鏡を右手で押し上げた。

「もういいかい」「もういいよー」の合図で、鬼である僕は動き出す。みんなはどうに隠れただれ。こじか。それともじつちか。思考

回路をフル回転させる。

小田切君
みつけ

太一君みに

一奈央ちゃん、みーつけ

次々と、標的を見つけていく僕。容姿は小学校低学年でも、夢を見て鬼を操っているのは、この僕。ちっちゃい子に負けるはずがな

い。いや、負けてたまるもんか。

「吉沢、みつけ」

ラストスパートを切る。もう勢いは止まらない。

ある種の快感。

残りもラスト一人となる。

でも、どうしてもその一人が見つからない。どこを探しても出でこない。

そのうち、日が暮れる。最初にみつかった子たちは、だれてきて、

「まだかよー」

「早くしろー」を連発している。あと一人、あと一人、という掛け声をかけるものはいなくなつた。

一人の子は、公園を出て行つてしまつた。誰も呼び止める子はない。みんな好き勝手に遊んでいる。僕ももう正直どうでもよくなつてきている。

「今日はこれで解散だー」

と言われたら、喜んで鬼ごっこを止めただろう。最後の一人だつて、解散となれば、ひょこひょこと現れるはずだ。

よし、ここは僕が自ら解散を提案してみよう。

僕が意を決した、その時だ。

先ほど公園を出て行つた女の子が悲鳴をあげた。

なんだなんだ、と声のした方にかけつける僕たち。

そこにいた。いや、あつたのは、僕がずっと見つけ出せないでいた最後の一人の抜け殻だった。彼女は、ルールを破り、鬼ごっこをしていたはずの公園を後にし、その後車に引かれていたのだ。それからだいぶ時間が経つているのか、まわりの血は赤黒い固体となつていて、彼女の体は頬りなさげに横たわっていた。

僕はそつと、彼女の体を起こす。首はまるで、首の据わつていな生まれたでの赤ちゃんのようにだらんと垂れ下がり、体は当たり前だけど、冷えていた。正氣はない。

が、彼女の顔はかすかに笑っている気がした。

そして、初めてそこで気づくのだ。

その子の最期の顔が、きみが僕に見せる顔にそっくりだつてことに。

決して、その子はきみに似ているわけじゃないけど、僕はその夢を見るたび、きみを思い出す。そして、不安になる。五年前にまた逢おうと約束し、さよならして以来、きみは今一体何をしているんだい。

プロローグ（後書き）

小説を執筆し始めてから年が浅い為、文章の構成の仕方、言葉の使い方等に間違いがあるかと思いますが、自分らしい文章を書こうと日々努力しています。
どうぞ宜しくお願ひします。

第1話 谷口の情報（前書き）

ここからが本編といった感じです。

第1話 谷口の情報

一

「悠一、ニユースだニユース！」

十一月の第一火曜日の朝のホームルーム前、僕はクラス一の情報通（マニア）というと、本人が怒るから（）である谷口敬太に声を掛けられた。

「最近、ずっと悪夢に魘され、ろくな睡眠をとっていない僕の目の中には隈が出来つつある。そんな寝ぼけ眼で僕は訊いた。

「朝から何の用だよ。おはよの挨拶もなし！」

「だから、ニユースだ！ つづってんだろ」

谷口は目を輝かせ、「しかも、お前にとっちゃ人生最大である」と間違いないの、とつておきのやつだ」と付け加えた。

「ソレ、またお前の得意なデマだろ」

谷口の情報はまるであてにならない。

これは僕が谷口と長年付き合つてきた上で思うことだ。奴の情報を信じると痛い目に合う。人を信じることは大事なことだけれど、すぐに心を許すと駄目だ。これも奴と付き合つてきて思うことだ。結構、世の中、俗に言つ世間一般にも通用するんじゃないかな、とも思う。

「何だよ。ここの俺の情報を疑つてのか」

「ああ、信用なしだよ。できれば、他をあたつてくだやー」

「ここのネタは、お前限定なんだ」

「お得意様限定ネタ、つてことか」

「んー、まあそうだな」

谷口の口調からすると、まだいまいち乗り切つていらない客にあまり煮えきっていないようだったが、返事を待たず、奴は話し出した。相当、喋りたがっていたらしい。

「昨日のタベに母さんが言つてたんだけど、1週間後に向かいの里中さんが帰つてくるんだってさ」

「マジ?」

「あ、そう」

突つ込むのもめんどくさい。眠いし。

「おう。情報源が俺の母さんだからな。俺の次に信用できる

何より、僕は奴の持ち出してきた情報に夢中だった。

「そつか。ゆづるが帰つてくるんだ」

「あ。今何かいががわしい」と考えませんでした

「お前じやあるまじし、考えるわけねえよ」

「でも、里中家が渡米したのって、確か俺らが小5のときだから、5年前つしょ。あれから、5年の月日が経ってるんじや里中もえらいこと」「ふふ……ふふ……ふ」

最後のふ、は別に奴が鼻血を出した。とか、そういうオチではない。僕が一発頭を殴つてやつたのだ。

「いってえ、とか嘆きつつ、まだ飽きもせず奴は「里中がアイドル並みに可愛くなつてたりしたらどうすの?」とか抜かしている。

「今度は、その口きけないようへし曲げてやるわつか」

「いえ、間に合つてます」谷口が急に真顔になつて言つ。何が間に合つているのか、理解不能だ。

「でもや、いやほんとに冗談抜きでさ、里中が美少女になつてたらどうするよ? そしたら、学年、いや、学校中の野郎たちの注目の的だぜ? 美少女転校生。なんとなく響き的にもエロくね? 学校ではきちんと校則守つて中学生やつてるくせして、裏では何人もの愛人がいんの。何しろ、美少女転校生だから」

「それ以上言うな、脳が腐る」それに、と僕は言つ。

「アイツはそんな子じやないだろ。とにかくいい子なんだ。お前も知つてるだろ」

「ああ。……それにしても、真に受けんなよ。悠一つて意外と神経質だよな。俺じゃついてけない」

「お前が楽天的過ぎるんだ」

「そんなもんかね。まあ、里中がどんなになつてたとしても、里中は里中だしな。中身がまんまじや、必然的に愛人の線は消えるか。つまんねえの」

「お前の頭はそんなことしか考えられないのか」

「ん。まだまだいろいろあるぜ。もち、愛人つて線が抜けただけで、美少女転校生つてのは消えてない。巨乳、ロリショタ……それから……い、や、やめる、ゆうこちー」

今度は唇の端を容赦なく引っ張つてやつた。これでさすがに奴も憲りるだろ？。きっと。

第1話 谷口の情報（後書き）

「彼女の記憶」第1話目です。文章がこんなでも、至つて本人、眞面目に書いています。（汗）宜しくお願ひします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6325b/>

彼女の記憶

2010年10月16日04時57分発行